

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K15909

研究課題名(和文) 大学間連携による保健師業務研究サポートを通じたファカルティ・ディベロップメント

研究課題名(英文) faculty development through research support by collaboration among universities for public health nurses

研究代表者

石丸 美奈(坪内美奈)(Ishimaru, Mina)

千葉大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：70326114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：千葉県内看護系大学のうち8校の公衆衛生看護学教育等を専門とする教育研究者が連携して、県下の保健師業務研究を継続的にサポートした。保健師の能力向上に関与すると共に、教員も業務研究のサポート経験をリフレクションするプロセスを通して、教員のファカルティ・ディベロップメントを行った。4つの調査より、業務研究サポートを効果的に推進するための保健師側の要件、および教員側の要件、保健師自身が感じた成長、および教員の能力向上に必要な要件の結果をふまえて、大学間連携による保健師業務研究サポート方法をCHIBAモデルとして検討した。今後は、千葉県公衆衛生看護学教育連絡会議の一活動として実施・継続したいと考える。

研究成果の概要(英文)：Faculty in public health nursing in Chiba prefecture created the inter-university cooperation council and provided continuous support for Public Health Nurse's practice-based research. There have been annual conferences on public health services for over 45 years in Chiba. For Public Health Nurses, they had group reflection on experiences of practice-based research. For faculty, they provided research support and after that they did self-reflection and group reflection. Finally, we discussed our research support model for public health nurses, which called "Chiba model". Through the research support, we would like to pursue Public Health Nurse's health care practice improvement, Public Health Nurse's learning and professional development. In addition, we would like to continue to work on faculty development.

研究分野：公衆衛生看護学/地域看護学

キーワード：業務研究 保健師 研究サポート ファカルティ・ディベロップメント

1. 研究開始当初の背景

平成 26 年に看護学科のある大学は 226 校になり、わが国の看護学教育は大学教育への移行が急速に進んでいる。看護系大学が、資質の高い看護職の育成という社会の要請に応えていくには、看護職としての実務能力や看護学を学問として教授する能力、研究を遂行し発展させる能力、実践・教育・研究を通じて現場の看護実践の質向上への貢献する能力等が求められ、継続的に能力開発を行うことが課題である。

このために、看護実践現場との連携・協働は欠かせない。国内外の文献によると、その現状は、看護学実習や研究、現任教育など多様であり、大学と実践現場との連携・協働の成果は、双方に共通して互いに刺激をもたらすこと、臨床能力の向上、研究能力の向上、教育技能能力の向上などが報告されている。しかしながら、それは限られた大学と施設の取り組みであることが多い。

千葉県では、本庁保健部署が保健活動業務研究を現任教育の一環として所掌し、45 年間継続されている。当初より千葉大学の協力があり、昨今では県内の看護系大学の協力も得て実施されている。これら千葉県内の看護系大学の連携を活かして、教員が保健師の業務研究を継続的にサポートすることを通して、保健師も教員も互いに成長しあう連携モデルを構築したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究においては、千葉県内看護系大学のうち 8 校の公衆衛生看護学/地域看護学教育を専門とする教育研究者(以下、教員とする)が連携して、県下の保健師業務研究を継続的にサポートする。それにより、保健師の能力の向上に関与すると共に、教員も業務研究のサポート経験をリフレクションするプロセスを通して、教員の能力開発(ファカルティ・ディベロップメント)を行う。そして、この大学間連携により、保健師の業務研究を

サポートし、経験をリフレクションすることを通して保健師集団と教員が互いに成長しあう試みを、「CHIBA モデル」として構築したい。

3. 研究の方法

(1) 研究の枠組み

本研究は、千葉県公衆衛生看護学教育連絡会議を通して培われてきた連携をさらに発展させるものである。

(2) 取り組み状況

業務研究のサポート実施手順の明確化

業務研究のサポート(周知、申し込み手続き、調整等)を行い、教員間、また保健師間でリフレクションする実施手順を記述し、整理した。

教員による研究サポートとリフレクション(セルフリフレクション、グループリフレクション)

教員による研究サポートは、平成 27 年度は、3 県型保健所(サポート教員延べ 3 名)、9 市町 10 部署(サポート教員延べ 12 名)に対して実施した。平成 28 年度は、4 県型保健所(サポート教員延べ 6 名)、6 市町 7 部署(サポート教員延べ 9 名)に対して実施した。サポート方法は、保健師との話し合いで決まり、1~4 回の対面形式と 1~15 回のメール形式を組み合わせ実施していた。

サポートを担当した教員は、保健師に直接的に業務研究のサポートをした後にはセルフリフレクションを実施した。

業務研究メンバーの保健師によるグループリフレクション(代替の質問紙調査)

保健師が業務研究の経験を振り返り、学びに変えられるように意図して、サポート教員がファシリテーターとなって、グループリフレクションを行った。平成 28 年度はグループでの振り返りを依頼した。

平成 27 年度に業務研究を実施した保健師

のグループリフレクションは、7施設で1~5名の単位で行われた。また、平成28年度末に実施した質問紙調査に対しては、平成27年度実施の施設からは9施設、平成28年度実施の施設からは11施設から回答があった。

千葉県保健活動業務研究の継続要因に関するインタビュー調査

千葉県保健活動業務研究発表会の主管課の保健師より、業務研究サポートの前提である千葉県保健活動業務研究が45年間継続している要因、および結果より導いたCHIBAモデルについての意見を情報収集した。

研究サポート教員の研究、社会貢献の分野の教員能力のアセスメント

研究サポートする教員(13名)の【研究、社会貢献の分野の教員能力のアセスメント】をした。この際に、看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイド Ver.2を活用した。これは、看護系教員の能力向上のためのFDを促進するために開発され、各自がのびしていきたい能力を明確化する等の活用が期待されているものである。

実施期間：倫理審査承認後H27年6月～平成29年3月31日

倫理的配慮：千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を得たのちに本研究を実施した。

(3) 調査方法

調査1

a 目的：保健師への業務研究サポートが効果的に行われるために必要な要因を抽出し、業務研究サポートを効果的に推進するための教員側の要件および、保健師側の要件を検討する。

b 対象：本研究メンバー教員15名(業務研究を直接的にサポートした教員(以下、サポート教員)と業務研究指導に熟練した教員(以下、アドバイザー教員))。

c 方法：グループインタビュー調査。サポー

ト教員とアドバイザー教員を交えたグループリフレクション(以下、GR)で話し合われた内容を調べた(1年目：7名、9名の2グループ。2年目：6名、6名、5名の3グループ。所要時間は約2時間/回)。サポート教員には、サポート概要記録とサポート後に行ったセルフリフレクションの記録を見ながら語ってもらった。GRの観点は、業務の改善・充実となるよう業務研究をサポートできたか、教員自身も能力向上が感じられたか等であった。発言はICレコーダーに録音し、逐語録とした。逐語録から、保健師への業務研究サポートが効果的に行われるために必要な要因を抽出し、業務研究サポートを効果的に推進していくための教員側の要件および保健師側の要因として整理し、教員間で検討した。

d 実施時期：平成27年12月と平成28年12月

調査2

a 目的：大学間連携による保健師業務研究サポートの成果について、業務研究を経験した保健師にみられた成長の視点から明らかにする。

b 対象：平成27年度および平成28年度に教員による継続的サポートを受け業務研究に取り組んだ保健師。

c 方法：自記式質問紙調査を実施した。対象者数は平成27年度13名(県型保健所3、市町10)、平成28年度11名(県型保健所4、市町7)である。調査項目は、ア.属性(業務研究経験回数、保健師経験年数)、イ.業務研究より得た学び、ウ.業務研究の経験をよりよい業務にするためにどのように活かそうか(活かせたかを含む)、エ.業務研究の経験を保健師としての専門性向上にどう活かせるか(活かせたかを含む)であり、自由記載を求めた。回収した質問紙の記述内容のイ.業務研究より得た学び、ウ.よりよい業務への活用、およびエ.専門性向上への活

用から、業務研究の経験により保健師にみられた成果を抽出してデータとし、質的帰納的に分析した。

d実施時期：平成 29 年 1 月 28 日～2 月 28 日

調査 3

a 目的：大学間連携による保健師業務研究のサポートとリフレクションの活用を通して、教員の研究および社会的貢献に関わる能力の変化を明らかにすることである。

b 対象：保健師の業務研究をサポートする教員 12 名

c 方法：「看護学教育における FD マザーマップ」の「研究」と「社会貢献」能力の項目を選択し、研究サポート開始前（平成 27 年 6 月）と研究サポート終了時（平成 29 年 2 月）に各教員が自己評価を実施した。また、研究サポートのプロセスにおいて、個人リフレクション、グループリフレクションを行い、サポート方針の検討や問題の解決に努めた。

4. 研究成果

(1) 調査 1

業務研究サポートを効果的に推進していくための教員側の要件は 22 の要因から 5 つの要件に整理された。具体的には、＜教員間で連携をとってサポートする＞＜研究開始の段階から保健師と教員間の関係形成をはかる＞＜研究の進捗にあわせたサポートをする＞＜保健師のモチベーションが向上するようサポートする＞＜保健師が組織的に業務研究に取り組めるようサポートする＞であった。

次に、保健師側の要件は、抽出された 17 の要因から 4 つに整理された。その内容は、＜業務研究を行う職場環境を整える＞＜業務改善の意図をもって研究に取り組む＞＜業務改善のモチベーションがある人を主担当として研究に取り組む＞＜教員と連携を取りながら研究の進捗具合に合わせた支援

を活用する＞であった。

以上より、教員間の連携体制を整え、保健師との相互作用を通して、保健師が組織的に、かつ意欲的に研究に取り組めるようサポートすること、また、保健師側の業務研究の実施体制を整え、教員と保健師とが連携しながら適切にサポートを活用できるよう援助することが有効であると考えられた。

(2) 調査 2

質問紙回収数と研究協力者の属性

質問紙回収数は平成 27 年度 9 名、平成 28 年度 10 名の合計 19 名で、回収率は 79.2%であった。研究協力者の業務研究経験回数は 1 回が 3 名、2 回が 6 名と約半数を占め、保健師経験年数は 1 年～30 年以上まで様々だった。

保健師にみられた成果

保健師にみられた成果は、8 つのカテゴリーに整理された。その内容は、＜保健師活動の原動力の活性化＞＜地域のニーズを把握する視点や方法の拡大＞＜評価や根拠に基づいた活動の継続・発展＞＜個々の対象や地域へのアプローチの視点や方法の拡大＞＜関係機関との意図的な関係づくり＞＜新たな取り組みの検討や発展＞＜チームでの課題共有や学びあい＞＜業務研究の意義の理解と基礎的知識の習得・活用＞であった。

教員のサポートによる業務研究を経験した保健師の成長として、モチベーションの向上、活動の視点の拡大、新しい方法や手段の導入、マネジメント能力の向上、チームとしての成長などがみられた。保健師が業務研究の成果を実体験できるよう教員のサポートを行うことにより、業務研究に取り組む保健師だけでなく、組織の成長や保健師活動の発展につながることを示唆された。

(3) 調査 3

対象者の背景：12 名の教員経験年数は、1 年から 16 年、業務研究サポート経験回数は、

0回から10回以上と多様であった。

「研究」と「社会貢献」能力の変化：

a 「研究」能力：対象者が研究サポートを通して能力向上の変化があったと自己評価した項目は、「研究」能力を表す26項目のうち20項目であり、変化を認めた対象者の多い順に「データの取り扱いとその方法」「研究成果をもって看護の現場へコミットする」「発信する研究の社会的意義の理解」等であった。

b 「社会貢献」能力：対象者が研究サポートを通して変化があったと自己評価した項目は、「社会貢献」能力を表す7項目のうち3項目であり、変化を認めた対象者の多い順に「社会貢献のあり方」「ニーズ把握の方法」「看護系大学のリソースとしての役割」であった。

自己評価結果から、業務研究サポートを通して、教員の「研究」および「社会貢献」能力が向上していることが示唆された。教員は、多様かつ豊富なデータを取捨選択し整理する方法の理解を深め、教育と実践現場に成果を還元する意義やその還元が保健師の実践や研究への意欲向上に繋がることを再確認していた。また、多様な背景を有する教員が連携してサポート方針の検討や問題の解決に努めたことも個々の能力向上に貢献した可能性が高い。

以上の4つの調査結果をふまえ、業務研究サポートを効果的に推進していくための保健師側の要件、教員側の要件、保健師自身が感じた成長、および教員の能力向上に必要な要件の観点を合わせて、「CHIBAモデル」として構築、継続を検討した。

今後も、千葉県内の看護系大学の公衆衛生看護学教育等を専門とする教育研究者（以下、教員とする）が連携して、県下の保健師が行う業務研究を継続的にサポートしたいと考える。今回のモデルを、平成29年度に千葉県公衆衛生看護学教育連絡会議で検討し、平

成30年度から連絡会議の一活動として実施したいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

1. 石丸美奈、鈴木悟子、飯野理恵、宮崎美砂子、杉田由加里、雨宮有子、佐藤紀子、原田静香、櫻井しのぶ、鶴岡章子、安藤智子、鈴木明子、岡田由美子、藤井広美、鈴木美和：大学間連携による保健師業務研究サポートを効果的に推進するための教員側の要件、日本地域看護学会第20回学術集会、2017年8月5日6日（大分県別府市・別府国際コンベンションセンター（発表予定））
2. 鈴木悟子、石丸美奈、飯野理恵、宮崎美砂子、杉田由加里、雨宮有子、佐藤紀子、原田静香、櫻井しのぶ、鶴岡章子、安藤智子、鈴木明子、岡田由美子、藤井広美、鈴木美和：大学間連携による保健師業務研究サポートを効果的に推進するための保健師側の要件、日本地域看護学会第20回学術集会、2017年8月5日6日（大分県別府市・別府国際コンベンションセンター（発表予定））
3. 鶴岡章子、石丸美奈、鈴木美和、鈴木悟子、雨宮有子、安藤智子、鈴木明子、岡田由美子、藤井広美、原田静香、櫻井しのぶ、佐藤紀子、飯野理恵、杉田由加里、宮崎美砂子：大学間連携による保健師業務研究サポートの成果 - 業務研究を経験した保健師の成長の視点から -、日本地域看護学会第20回学術集会、2017年8月5日6日（大分県別府市・別府国際コンベンションセンター（発表予定））
4. 鈴木美和、石丸美奈、杉田由加里、鈴木悟子、飯野理恵、雨宮有子、原田静香、鶴岡章子、藤井広美、鈴木明子、岡田由美子、安藤智子、宮崎美砂子、佐藤紀子、櫻井しのぶ：大学間連携による保健師業務研究サポートの成果 - 業務研究指導を担当した教員の

研究および社会的貢献に関わる能力の変化
-、日本地域看護学会第20回学術集会、2017年8月5日6日(大分県別府市・別府国際コンベンションセンター(発表予定))

5. Mina Ishimaru, Rie Iino, Reiko Tokita, Misako Miyazaki, Yukari Sugita, Tomoko Ando, Yuko Amamiya, Noriko Sato, Yumiko Okada, Akiko Suzuki, Miwa Suzuki, Shizuka Harada, Shinobu Sakurai, Hiromi Fuji, Shoko Tsuruoka (Japan) : Using faculty self-reflection to construct a research support model for public health nurses. The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing, July 1-3, 2016, Busan Bexco, South Korea. (Best Oral Presentation)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

石丸 美奈(坪内美奈)(ISHIMARU, Mina)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号:70326114

(2)研究分担者

飯野 理恵(IINO, Rie)
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号:40513958

鈴木 悟子(SUZUKI, Satoko)
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号:10780512
(平成28年度のみ研究分担者)

杉田 由加里(SUGITA, Yukari)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号:50344974

佐藤 紀子(SATO, Noriko)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・教

授 研究者番号:80283555

安藤 智子(ANDO, Tomoko)
千葉科学大学・看護学部・教授
研究者番号:80748872

鶴岡 章子(TSURUOKA, Shoko)
三育学院大学・看護学部・教授
研究者番号:80554972

鈴木 明子(SUZUKI, Akiko)
城西国際大学・看護学部・准教授
研究者番号:70241974

藤井 広美(FUJII, Hiromi)
了徳寺大学・看護学部・准教授
研究者番号:10336844

櫻井 しのぶ(SAKURAI, Shinobu)
順天堂大学・医療看護学部・教授
研究者番号:60225844

時田 礼子(TOKITA, Reiko)
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号:70554608

(平成27年度のみ研究分担者)

(11)連携研究者

宮崎 美砂子(MIYAZAKI, Misako)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号:80239392

雨宮 有子(AMAMIYA, Yuko)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授
研究者番号:30279624

岡田 由美子(OKADA, Yumiko)
城西国際大学・看護学部・助手
研究者番号:80747296

鈴木 美和(SUZUKI, Miwa)
淑徳大学・看護栄養学部・准教授
研究者番号:20396691

柴田 恵子(SHIBATA, Keiko)
淑徳大学・看護栄養学部・講師
研究者番号:80646729
(平成27年度のみ連携研究者)